

第3期中京区基本計画 (案)



中京区役所
Nakagyo Ward

ごあいさつ

目 次

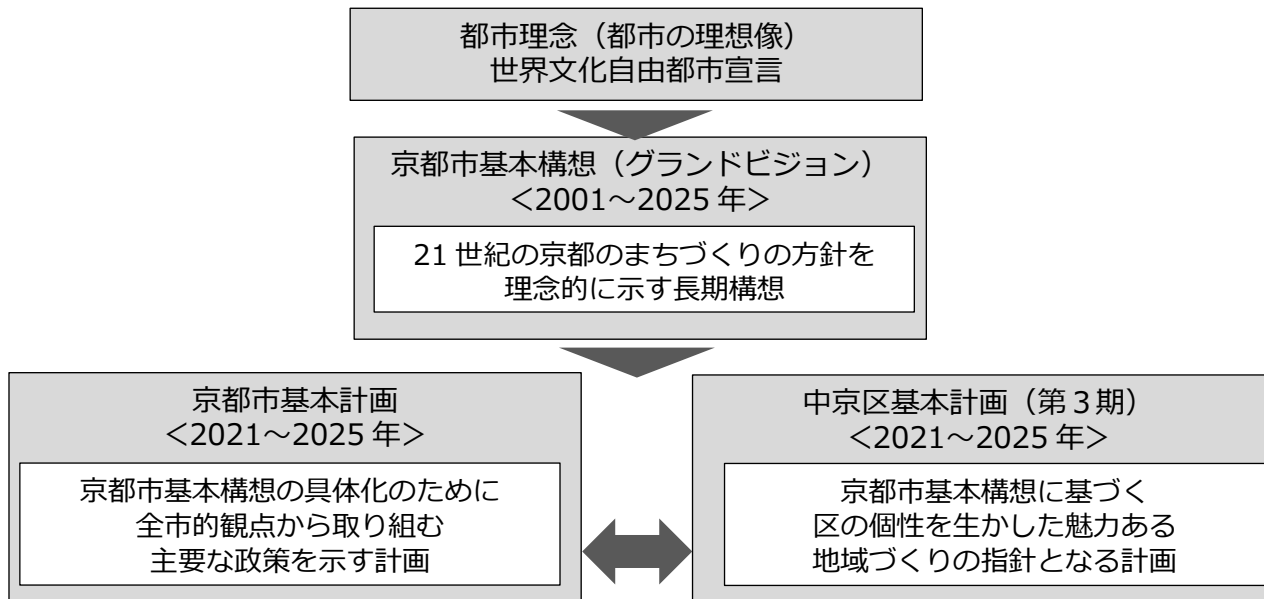
中京区基本計画について.....	3
1. 計画の位置付け	
2. 計画期間	
3. 策定方針と策定方法	
4. 計画の全体像	
第1章 まちの姿.....	5
第2章 まちづくりの課題.....	9
重点課題1：地域交流の促進	
重点課題2：文化とにぎわいの創出	
重点課題3：持続可能なくらしの実践	
トピック 京都市の厳しい財政状況	
第3章 今後のまちづくりの方向性.....	19
第4章 目標実現に向けた戦略.....	23
戦略1：ポストコロナ社会に対応した柔軟で開かれた地域組織づくり	
戦略2：だれもが互いに認め合い、支え合えるコミュニティづくり	
戦略3：地域ぐるみでの子育て環境の充実	
戦略4：地域ごとの歴史文化を生かした個性あるまちづくり	
戦略5：商い・ものづくり・学問のつながりが生み出すにぎわいづくり	
戦略6：安心・安全に住み続けられるまちづくり	
戦略7：持続可能なライフスタイルの継承・発展	
第5章 計画推進のしくみ.....	39

中京区基本計画について

1. 計画の位置付け

本計画は、区の将来像やまちづくりの目標を区民の皆さんや事業者、大学等と行政が共有し、まちづくりを進めていくための指針であり、それらのさまざまな主体と行政が共に汗を流して協働する「共汗型計画」です。

本計画は、「世界文化自由都市宣言」の都市理念の下、「京都市基本構想（グランドビジョン）」に基づくとともに、全市的な未来像と主要な政策を明示した「京都市基本計画」とは同列・相互補完の関係にあります。



2. 計画期間

令和3（2021）年度～令和7（2025）年の5年間

※ 第1期：平成13（2001）～平成22（2010）年の10年間

※ 第2期：平成23（2011）～令和2（2020）年度の10年間

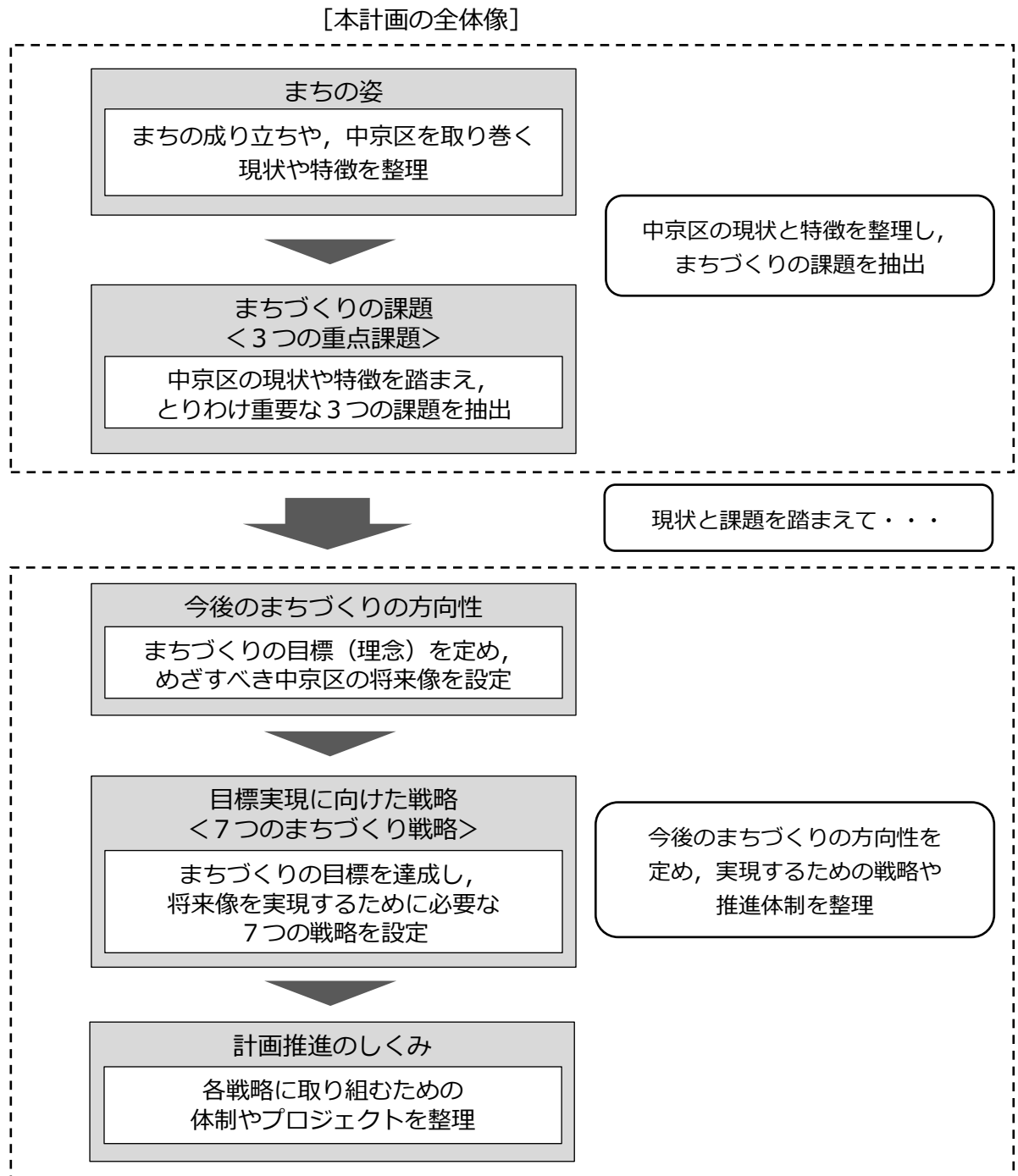
3. 策定方針と策定方法

本計画の策定に際しては、地域の各種団体の代表者や学識経験者等で構成する「中京区基本計画推進会議」で協議を重ねました。とくに、戦略の方向性や計画推進のしくみ等については、区内の各分野においてさまざまな地域活動をされている方を中心に構成した「中京区基本計画検討ワーキンググループ」を設け、集中的に協議を行いました。

また、区民の声を直接反映させるため、中京マチビト Café 特別編『マチビト×中京の未来予想図』の開催、素案への区民意見募集、最終案へのパブリックコメントの実施など、策定の各段階において区民の皆さんに積極的に参画していただきました。

4. 計画の全体像

本計画は、まちの姿、まちづくりの課題、今後のまちづくりの方向性、目標実現に向けた戦略、計画推進のしくみの5つの章で構成しています。「共汗型計画」である本計画に掲げるすべての施策は、区民の皆さんや事業者、大学等と行政がそれぞれの役割を認識し、連携しながら進めるものであり、地域をよりよいものとするため、自治活動をはじめとしたまちづくり活動に積極的に参加することが期待されます。そして区役所には、区民活動が行われる基盤づくりや活動への支援が求められています。



第1章 まちの姿

まちの成り立ち

中京区は、昭和4年4月、上京区の南部、下京区の北部を区域として誕生しました。

京都市のほぼ中央に位置しており、平安建都の頃から貴族の邸宅や商業地として発展してきた東部は、今日も官公庁、政治・経済団体、金融機関、商店等が集中する観光・娯楽・ショッピング等で賑わう京都市の産業・経済活動の中心です。また、古くから基盤の目状に「町」が形成された東部では、「町」が連携した「町組」の編成や「番組」への再編を経て、15の学区を形成しています。

同じく、平安京のメインストリートである朱雀大路（現在の千本通）の走る西部も平安建都の頃から開発が進み、時代の変遷のなかでその後、市内への重要な農産物の供給地として発展していきました。大正末期以降は、道路や鉄道等の都市基盤の整備にともない商工業と住宅が混在する市街地として都市化が進展しています。また、明治以降の朱雀野村や朱雀学区への再編を経て、昭和16年に現在の8つの学区を形成したことで、中京区では、自治活動の基盤となる学区は23となり、現在も長い歴史のなかで育まれてきた自治の精神を受継ぎながら地域活動を展開しています。

中京を取り巻く状況と特徴

「人口の増加が鈍化する一方、長寿化が進み、単独世帯が増えるまち」

- 中京区の人口は、都心の利便性や充実した文化教育環境を背景としたマンション建設の増加等を契機に、平成7年から増加し、平成27年の国勢調査では約10.9万人となりました。一方、近年は、インバウンドの影響からホテル需要が伸び、人口の増加は鈍化し、令和2年の住民基本台帳人口では前年よりも減少する結果となっています。
- 出生数についても、全市で減少している中、中京区は増加傾向にありましたが、近年は鈍化しています。また、ひとりの女性が一生の間に生む子どもの平均数を示す合計特殊出生率は、市全体よりも低い状態が続いており、令和元年も1.02と低迷しています。
- 高齢化率（65歳以上の割合）は、市全体よりも低いものの、上昇を続けており、平成27年時点で23.9%となっています。
- 世帯類型では、単独世帯が増加しており、平成27年時点で全世帯の55.4%（65歳以上の単独世帯は12.7%）を占めています。

「地域コミュニティのつながりが強いまち」

- 近年、京都市でも地域コミュニティにおける住民同士のつながりや地域活動の減少といった課題が生じていますが、中京区の「自治会・町内会加入率」は、平成30年時点で74.3%と市全体の67.7%を約7%上回っています。
- また、京都の伝統行事である「地蔵盆」の実施率（平成25年）は85.1%と、多くの地域で実施されています。地蔵盆をはじめ、地域の祭りや体育祭等の行事は、世代を超えて地域のひとびとをつなぎ、町内の連携や絆を強める機会になっています。

「教育・子育て環境の充実するまち」

- 近年、市全体の小学校児童数が減少する中、中京区では増加傾向（平成29年には4,392人）にありましたが、最近では人口の増加が鈍化することに比例して、児童数も微減傾向にあります。
- 地域ぐるみで教育を進める学校運営協議会制度をいち早く取り入れるなど、教育環境の充実に加え、京都市の子育て支援総合センターである「こどもみらい館」や保育所、児童館、病院、さらには「中京ベビーズサポートマーケット」や各学区で運営されている「きつずばあく」など、さまざまな主体による充実した子育て支援が展開されています。

「多くの文化財を有する歴史と文化のまち」

- 中京区は、世界遺産である元離宮二条城をはじめ多くの有形、無形の文化財が存在する歴史と文化の息づくまちです。京都市指定・登録文化財（有形文化財のみ）も、市全体の15.0%にあたる53件（令和2年4月現在）が中京区にあります。
- また、神事である祇園祭をはじめ、奉祝行事として始まった時代祭や京都の伝統行事である地蔵盆など、多くの地域で祭りや行事が行われています。

「個性のある通り文化と町並みが残るまち」

- 通りごとに個性のある文化や町並みが残っている中京区では、「地区計画」（令和2年度時点で10地区）や「地域景観づくり協議会」（令和2年度時点で4団体）といった制度を活用し、個性豊かなまちづくりや町並みの保全が進められています。
- 平成20、21年度に行われた京町家まちづくり調査によると中京区には、9,183軒の京町家が存在していました。同調査では、とくに建物の保存状況が良好な京町家は、市内で最も多い6,861軒あり、区民ひとりひとりの努力が美しい町並み景観の保全につながってきました。しかしながら、社会経済環境の変化や生活スタイルの変化等により、町家の減少は続いており、一層の保全活動が求められています。

「多くの企業や商店、官公庁の集積する、京都の経済を牽引するまち」

- 中京区は、御池通、烏丸通、河原町通、四条通沿いに多くの企業や商店、官公庁が集積する、ビジネス活動の中心地です。平成 28 年経済センサス-活動調査によると、中京区の事業所数は市内で最も多い 9,871 件で、京都の経済全体を牽引しています。

「和装産業をはじめとする伝統・文化と時代の先端が交わるまち」

- 中京区は、「卸売業、小売業」や「宿泊業、飲食サービス業」の割合が高いまちです。市内有数の繁華街や世界遺産「元離宮二条城」をはじめとする国際的観光地を有し、世界各地からさまざまなひとが集い、交流するにぎわいのまちです。また古くから、伝統産業である和装産業の中心地でもあります。
- さらに近年は、大学等の知の集積、交通の利便性、脈々と根付く京都の進取の気風等が注目され、IoT（※1）や AI、情報通信といった分野の最先端で新たな市場を開拓するスタートアップ（※2）の集積も進んでいます。国内外の大学や研究機関、支援機関等との連携により、世界に羽ばたくスタートアップの創出・育成が進んでいます。

「昼間の人口が夜間に比べて約 1.5 倍、にぎわいと華やぎのまち」

- 多くの事業者等を抱える中京区は、通勤・通学による流入のため、昼間は夜間の 1.5 倍程度まで人口が膨らみ、昼夜間人口比率（平成 27 年）は、144.6%となっています。
- また、通勤・通学以外でも、観光や買物、ビジネス等の目的で多くのひとが訪れる中京区の実際の昼間人口はさらに多くなっており、にぎわいと華やぎのまちとしての顔を有しています。

「歩いて楽しい、環境に配慮したまち」

- 中京区は概ね平坦な地形で、徒歩や自転車での移動も容易なコンパクトにまとまったまちです。鉄道網やバス路線等公共交通機関も充実していることから、過度にクルマに頼らない生活ができる、歩いて楽しめるまちです。
- 四条通と周辺幹線道路の自動車交通量は、四条通の歩道拡幅等に伴い、平成 18 年から 27 年にかけて約 4 割減少しており、環境負荷を抑えるまちづくりが進んでいます。
- また、各人が家の周りを掃く「かど掃き」の習慣や地域ぐるみで展開されている清掃活動をはじめ、各家庭の樹木や草花はもとより沿道の植樹帯に至るまで、まちの緑が区民の手で守られている環境意識の高いまちです。

※1 「IoT」

「Internet of Things」の略であり、あらゆるモノがインターネットにつながり、相互に通信し合う技術

※2 「スタートアップ」

新しいビジネスモデルで急成長をめざす新興企業

写真・イラスト

第2章 まちづくりの課題

重点課題1「地域交流の促進」

中京区は、「自分たちのまちは自分たちでつくる」という住民自治の伝統を受け継いでおり、学区を中心とした地域活動が活発なまちです。

しかし、近年は少子化や長寿化、核家族化といった家族形態の変化等を背景に、地域のつながりの希薄化や福祉的課題の複雑化・複合化、子育て家庭の孤立化等が大きな課題となっています。

さらに、2020年の新型コロナウイルス感染症の拡大により、住民同士の日常の交流やこれまで取り組んできた地域活動が大きく制限を受けたことで、これらの課題はより深刻化、顕在化しました。

このため、「新しい生活スタイル」にもしっかりと対応しながら、地域コミュニティの活性化や地域共生社会の実現、教育・子育ての支援など、地域交流の促進に取り組んでいくことが急務となっています。

■ 地域のつながりの希薄化

中京区では、長年にわたり、学区を基礎単位とする自治活動が盛んに行われており、高い住民自治の気風をもっています。一方で、小学校の統合や地域課題の広域化等により、学区の垣根を越えた活動の必要性も増しています。また、マンション等の集合住宅や単身者の増加により、以前に比べて、地域コミュニティ活動への参加が減少傾向にあり、地域でのつながりの希薄化が進んでいます。

写真・イラスト

<寄せられた区民の意見>

- ・ 町内会の加入率が減っており、役員のなり手も少なくなっている
- ・ 町内会側も加入してもらうための工夫が必要
- ・ 子どもの頃から地域活動への参加を促し、学区運動会や地蔵盆等の地域行事を活性化したい
- ・ NPOや学生等の力も借り、マンションに住んでいるひととの交流も進めたい
- ・ コロナ禍で集まれず、行事が中止になった。ITやオンライン会議導入等の工夫が必要
- ・ ICT（情報通信技術）を活用すれば、若い世代も含め、もっと活動に参加しやすくなるのではないかな

■ 福祉的課題の複合化・深刻化

少子化や長寿化，ライフスタイルの変化により，単身世帯，そのなかでもとくにひとり暮らしの高齢者は増加傾向にあります。

さらに，介護等従来からの福祉的課題に加え，育児を同時に抱えている世帯（ダブルケア）や高齢の親とひきこもりの子が同居している世帯（8050 問題[※]）など，複雑かつ複合的な問題を抱えている世帯の増加が懸念されます。

また，生活するうえで何らかの負担や悩みを抱えていても，適切な支援につながらず，地域で孤立し，課題を深刻化してしまう世帯の増加も課題となっています。

＜寄せられた区民の意見＞

- ・ 困り事があっても，どうしたらいいかわからないひとがいる。とくに認知症やひきこもり等の家族をもつ家庭は相談しづらい
- ・ 地域で気軽にあいさつができる関係をつくりたい
- ・ コロナ禍で外出できる場が減っている。とくに高齢者には運動や交流できる機会や場が必要
- ・ 見守り活動をするひとが足りていない。支援者同士の連携や定年退職後の男性の活躍に期待したい
- ・ 感染者に対する中傷等の差別は許されない
- ・ IT 化は便利な反面，とくに高齢者など，取り残されるひとが出るため，支援するひとが必要

写真・イラスト

※ 「8050 問題」

80 代の親とひきこもり状態の 50 代の子が同居する世帯の孤立化・困窮化に伴うさまざまな問題

■ 教育・子育てに対する意識の変革

子どもたちは、未来のまちづくりを担う主役であり、地域にとってかけがえのない「宝」です。

しかしながら、子育て環境をめぐっては、核家族化の進行や地域コミュニティの希薄化等による子育て家庭の孤立化や、共働き世帯の増加による仕事と子育ての両立の難しさなど、さまざまな課題が存在します。

また、とくに新型コロナウイルス感染症の拡大に際しては、地域コミュニティと子育て家庭、子ども同士が直接的にふれあい、交流する機会が減少し、学びの機会が制約され、子育て家庭のさらなる孤立化を招きました。

そのため、こうした課題を子育て家庭だけの問題にとらえるのではなく、地域社会や事業者、行政等のさまざまな関係者が連携して、子育てや教育に対する地域の意識を変えていくことが求められています。

<寄せられた区民の意見>

- ・ 地域で子どもを見かけても声をかけづらい。子どもを地域ぐるみで育てる雰囲気をつくっていききたい
- ・ 児童虐待等の不幸な出来事が起きないように地域で支え合いたい
- ・ 子どもの急な病気など、緊急時に頼れるひとがいない。子育てについて、気軽に相談できる場がほしい
- ・ 学区で実施されている「きっずぱあく」で友達ができた。子ども同士や親同士がつながれる場がもっと増えてほしい
- ・ コロナ禍で子どもと一緒にいける場所が減った。まちなかにもオープンテラス等が増えれば郊外まで行かなくても済む
- ・ マスクで表情が見えないだけでも影響が心配されるほど、子どもは見て学んでいる。ひとりひとりが子どもを育てているという意識をもつべき

写真・イラスト

重点課題 2「文化とにぎわいの創出」

中京区は、伝統行事やくらしの文化、歴史的な景観等の文化資源の宝庫であるとともに、事業所が集積する経済活動の中心地として多様な主体が活躍するにぎわいのあるまちです。

しかし、近年は少子化や長寿化、価値観やライフスタイルの多様化等を背景に、伝統的なくらしの文化や景観の継承、日常生活を支える身近な商店街の活性化等が課題となっています。さらに、新型コロナウイルス感染症の拡大が、接触機会の回避、消費の低迷等をもたらしたことで、これらの課題はより深刻化しています。また、情報化の進展等により、時代の変化のスピードも早まっています。

このため、「地域の宝」である歴史文化をしっかりと守り未来に継承するとともに、多様な主体と連携し、さらには、IoT（※）やAI等最新技術や従来にはない課題解決の手法も取り入れながら、まちの魅力を高めていく必要があります。

■ 地域文化の継承の危機

中京区は、豊富な文化資源を有するまちです。地域の歴史や文化は、長い年月をかけて日々のくらしや生業のなかで区民ひとりひとりが育んできた地域の宝です。

しかし、少子化による人口減少や核家族化の進行に伴い、区民の日々のくらしのなかで自然と受け継がれてきた文化の継承が危ぶまれています。さらには、地域のつながりが希薄化する中、これまで地域で脈々と受け継がれてきた地域の祭りや行事も、次の世代に継承していくことが困難になってきています。

<寄せられた区民の意見>

- ・ 地蔵盆や夏祭り等の地域の行事を次の世代につないでいくためにも、担い手を確保していきたい
- ・ 町内会の行事に参加したいが、住んでいるマンションが町内会に入っていない
- ・ コロナ禍で祭りができなかった。元々負担が大きかったので今後も復活できないかもしれない
- ・ 祭りや行事も変えられる部分は見直すべき
- ・ 町家等の伝統的な景観が消えつつある。伝統産品品を使う機会もあまりない
- ・ きもの文化や伝統的なくらしの文化を若いひとに受け継いでいきたい

写真・イラスト

※ 「IoT」

「Internet of Things」の略であり、あらゆるモノがインターネットにつながり、相互に通信し合う技術

■ にぎわいの継続に向けた社会変化への対応

中京区は、古くからさまざまなひとびとが集うにぎわいのまちです。商業活動も活発で、区内の商店街は日用品等を提供する区民の日々の暮らしを支える場であるとともに、「京もの」等の魅力的な商品を求め国内外から訪れる来訪者の声にも応え続けてきました。

しかし、近年は、観光客のマナー問題や商店の後継者不足、空き店舗の増加など、地域によってさまざまな課題を抱えており、さらに、ライフスタイルの多様化による消費者ニーズの変化、インターネット取引やキャッシュレス決済の普及等の外的環境の変化にも対応することが求められています。

一方、日常生活を支える身近な商店街という存在は、新型コロナウイルス感染症の拡大等をきっかけに、顔の見える安心感と地域コミュニティの場としての重要性が再認識されるようになっていきます。

<寄せられた区民の意見>

- ・ 観光客が増えて買物もゆっくりできなかったが、コロナ禍で人通りが激減し寂しい気もする
- ・ 後継者のいない老舗のお店がひっそりと消えていくのは残念。近所の商店街でも空き店舗が増えている
- ・ 外部資本の店が増えた一方で、地元のひとが営む店が減っている
- ・ コロナ禍で地域の絆や商店街の重要性を再認識した。なるべく地元のお店で買物をして地域を元気づけたい
- ・ 商店街の頑張りを応援したい。学生の意見を取り込むなど、新しいことにも挑戦してほしい

写真・イラスト

■ 産学公との連携と市民協働の拡充

まちづくり活動が活発な中京区では、地域の方々と連携して多くの学生がまちづくりに参画しています。授業やゼミ活動に限らず、地域に息づく豊富な歴史文化資源、課題が山積する環境や防災活動への関心の高まりなど、学生が地域とかかわるきっかけは無数にあります。学生にとって、地域の課題は生きた教材であり、地域団体や商店街等のさまざまな主体と出会い、解決策をともに考える実践的な学びの場となっています。そして、地域団体や商店街も学生を受け入れることで、大学の知見や若い柔軟な発想をまちづくりに取り込んできました。

地域課題が多様化、複雑化している現代においては、地域団体だけでまちづくりを担っていくことはますます難しくなっており、地域の活力を維持・発展させていくためには、これまで以上に産学公との連携を深めるとともに、多くの市民との協働を深めていくことが求められています。

■ 社会課題解決に向けた企業活動との連携

中京区では、地域に根差して活動する企業が祭りや行事等の地域のまちづくりの担い手となってきました。さらに近年はビジネスとして社会課題の解決に取り組む「社会的企業」が活躍するなど、多様な企業が集積し地域社会を支えています。

地域の課題が複雑化、広域化するなど、まちづくりを取り巻く状況が大きく変化していることから地域の課題解決に向け、こうした企業との連携が不可欠となっています。

また、区内には、IoT や AI、情報通信分野のスタートアップ(※)も立地し、新たな生活スタイルの促進に資するアイデアや技術を有する企業も存在することから、こうした企業との連携も求められています。

<寄せられた区民の意見>

- ・ 地域課題は多岐にわたっており、地域住民だけでは解決が困難な問題が増えつつある
- ・ NPO 等の市民活動と地元の自治活動との接点が乏しい。地域課題を解決するには、大学や企業も含めた多くの団体と協力関係をつくっていくことが重要
- ・ コロナ禍でオンラインが一気に普及した。地域も対応していけば、さまざまな団体や学生の協力が得やすくなる
- ・ 学生のまちづくりへの参加に当たっては、地域に学生の意見をじっくり聞いてほしい
- ・ 地域活動に参加する学生に単位を与えるしくみがあるとよい

<寄せられた区民の意見>

- ・ 地域企業の存在や魅力が住民や学生に十分伝わっていない。地元の企業には慢性的に人手不足のところもある
- ・ 地域と企業が出会う機会をもっと増やしていった方がいい。
- ・ ソーシャルビジネスの考え方は、今後の地域と企業の間関係を考えるうえでも重要だ
- ・ 起業等に挑戦するひとなが増えないとまちの活力がなくなる。ポストコロナも意識した新しいビジネスがどんどん生まれてほしい
- ・ コワーキングスペースを増やすなど、起業しやすい土壌を整備していくことが大事

※ 「スタートアップ」

新しいビジネスモデルで急成長をめざす新興企業

重点課題 3「持続可能なくらしの実践」

中京区には、幾度となく大きな戦乱や災害、疫病など、まちの持続や発展を脅かす危機に直面しながらも、地域の結束と知恵により見事に立ち直り、乗り越えてきた歴史が息づいています。

しかし、近年、地球温暖化による異常気象や自然災害が頻発しています。さらに、世界的な感染症の拡大が、まちの持続や発展を脅かす新たな脅威となっています。また一方、身近に起こりうる交通事故や犯罪、火災等をできる限りゼロに近づけることも必要です。

このため、持続可能なくらしをキーワードに、地域防災力の向上や危機管理の徹底、歩いて楽しいまちなかの創出や環境に配慮したライフスタイルの確立等に取り組んでいくことが求められています。

■ 迫りくる災害や感染症への備え

中京区は、警察や消防、事業者や学校等の関係機関の結びつきも強く、子どもたちの登下校時の見守り活動や学区ごとの充実した防災訓練など、地域を挙げた防犯や防災活動が活発なまちです。

しかし、地球温暖化による自然災害の頻発や世界的な感染症の拡大等に対応するためには、より一層の防災力の向上や危機管理の徹底が求められています。また、災害時の二次被害の防止や防犯上の課題にもつながる放置空き家の老朽化等の問題に対応していくには、さらなる関係機関の連携が必要です。

＜寄せられた区民の意見＞

- ・ 近所に空き家ができた。放置空き家にならないよう地域ぐるみで対応していかないといけない
- ・ 住んでいるマンションは町内会に加入していないので、災害時の対応がよくわからない
- ・ いざという時に地域住民が一丸となって行動できるよう、日頃からお付き合いを大事にしたい
- ・ 災害時は、皆が当事者意識を持ち、自分のできることは、自分でやらないといけない。
- ・ 子どもたちにも日頃から地域で役割を与え、育てていくことが、災害時に自分達に何ができるのかという視点をもつことにつながる
- ・ 備蓄物の保管場所確保を含め、感染症に対応した避難所運営を確立していくことが重要

写真・イラスト

■ 通りの復権（※）と歩いて楽しいまちなかの創出

中京区は、徒歩や自転車での移動も容易な歩いて楽しめるまちです。また、くらしの文化が根付いており、古くから「通り」を舞台に地域の祭りや行事が行われてきました。

しかし、クルマ優先社会の中、近年では宅配便の増加等に伴う路上駐車や通過交通の多さ、自転車マナー違反等により、「通り」を取り巻く環境は悪化しており、ひとびとが集う場としての役割が失われつつあります。

<寄せられた区民の意見>

- ・ 通過するクルマや路上駐車，駐輪を減らし，昔のように子どもが道路で遊べるようになってほしい
- ・ コロナ禍で自転車に乗るひとも増えており，自転車のルールやマナー啓発が重要
- ・ 自転車講習は，子ども達だけでなく，大人，とくに高齢者にも必要
- ・ 町並みや景観を守るには，市民の理解や所有者への支援が必要

写真・イラスト

※ 「通りの復権」

中京区では、区民のくらしや生業、催事や伝統が古くから「通り」で営まれてきましたが、現在では「通り」が単なる通過空間になってしまっています。そのため、クルマ中心のライフスタイルからの転換を図り、安心安全に往来できる、区民の日々のくらしや生業の空間としての魅力ある「通り」の復権をめざした取組を進めています。

■ 市民生活を最重視した持続可能な観光の模索

中京区には、悠久の歴史に培われた豊富な文化資源があり、国内外から訪れる多くの来訪者を惹きつけてきました。

一方、新型コロナウイルス感染症の拡大以前は、世界各地から来訪者が急激に増える中、京都の文化や習慣に対する理解が不十分なまま来訪されるひとも増え、マナー問題をはじめとしたトラブルが顕在化していました。

今後、新型コロナウイルス感染症の終息状況に応じて再び来訪者が増えることが予想されますが、従来のような来訪者の増加に起因するさまざまな問題を再発させない取組が求められています。

<寄せられた区民の意見>

- ・ ポストコロナの観光は、マナー問題など、以前起こった問題を繰り返さないことが重要
 - ※ 観光客のポイ捨てや騒音に困っている。民泊等の宿泊事業者は、地域の事情を理解し、宿泊客に徹底してほしい
 - ※ 観光客が増え過ぎたことでゆっくり史跡やまち歩きを楽しめないなど、「京都らしさ」が失われつつある
 - ※ 観光客の増加がホテルの急増を招き、地価の高騰につながっている
 - ※ 観光客が増えても、その恩恵が感じられない
- ・ 観光客には上辺だけでなく、京都の本質に触れてほしい
- ・ コロナ禍で観光客が減少した今こそ、魅力ある京都のまちのあり方を考えるべき

■ 環境に配慮したライフスタイルの確立

中京区は、古くから京都の産業、経済活動の中心地として発展してきました。

一方、現在は、地球規模で温暖化が急速に進む中、異常気象等さまざまな影響が顕在化しつつあります。都市化が進展した中京区でも便利な生活と引き換えに、多くの資源を使う生活様式が定着し、結果として、エネルギーの大量消費やごみを大量に排出すること等につながっています。

環境負荷の低減による持続可能なライフスタイルの確立が求められています。

<寄せられた区民の意見>

- ・ 温暖化の進展が自然災害の激甚化につながっている。ひとりひとりがもっと危機感を持ってエコな暮らしを実践する必要がある
- ・ クルマに依存しないまちづくりなど、エネルギー消費にも関心をもってほしい
- ・ 町内でも周知しているが、ごみの分別やごみ出しのルールを守らないひとがいる。もっと啓発が必要
- ・ コロナ禍でプラスチックごみが増えた。使い捨て社会からの脱却を意識しないといけない
- ・ 便利すぎる暮らしを見つめ直す時期にきている。昔からの生活の知恵を現代に生かしていくことも必要だ

トピック【京都市の厳しい財政状況】

現在、京都市の財政状況は、新型コロナウイルス感染症による税収の減少等により、厳しさを増しています。とりわけ、直近の令和3（2021）年度から令和5（2023）年度までの3年間は、現下の危機的な状況を克服し、持続可能な行財政運営に道筋をつけるため、歳出や受益者負担の改革に集中的に取り組んでいくこととしています。

◆ 財政が厳しいなかでも充実した行政サービスを維持

市民一人当たりの市税収入が他都市より少ない中、全国トップ水準の福祉・医療・教育・子育て支援等を実施。その水準を維持するため、職員数の削減や事業の見直し等の行財政改革を行ってきました。しかし、国からの地方交付税が大幅に削減され、収入が伸び悩む中、高齢化による社会福祉関連経費等の支出が増加。宿泊税の導入など、税収増の取り組みや行財政改革を実施してもなお、支出が収入を上回る状況が続いており、将来の借金返済の積立金（公債償還基金）等を取り崩し、将来世代へ負担を先送りしている状態です。

<具体的成果>

- ・ 保育所など待機児童が7年連続ゼロ
- ・ 大雨への浸水対策済み面積割合が全国トップ水準（市91%、全国58%） など

◆ 今後の収支見通しと財政再生団体になる危機

新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、市税収入の回復が見込めない中、社会福祉関連経費の増加が続くことで、今後、毎年度500億円もの財源不足が見込まれており、最悪の場合、財政再生団体になると、最低限の行政サービスしかできず、税金やさまざまな料金が値上げせざるをえないこととなります。

<影響（例示）>

- ・ 国民健康保険料3割値上げ
- ・ 保育料4割値上げ など

◆ 今後の改革の視点～最悪の事態を回避し、明るい未来を展望～

本市の財政状況や各施策の効果等を市民の皆さんと共有し、市民の皆様のご理解の下、真に必要な施策を持続可能にするための事業見直しや、公共施設の適正管理・受益者負担の適正化等に取り組むとともに、若者や企業の定着を図り、支え手を増やすことで税収増につなげ、すべての世代がくらしやすく、魅力・活力あるまちをめざします。

<具体的方針>

- ・ 若者・子育て世代の定住促進
- ・ 景観の保全と活力あるまちづくりの両立 など

中京区においても、これまで以上に徹底した「選択と集中」、「区民の皆さんとの共汗」及び「施策の融合」を図ることにより、「ふれあいとにぎわいのまち」の創造に取り組んでいきます。

第3章 今後のまちづくりの方向性

中京区では、中京区基本計画（第2期）において、公募で決定した「響きあう 人・まち・文化 中京区 ～わたしが創る ふれあいとにぎわいのまち～」をまちづくりの目標（キャッチフレーズ）に掲げ、このまちに住まい・集うひとびとがふれあい、交流し、地域の資源を生かしたまちづくりに取り組むなかで、新しい出会いや新たな価値を創造することをめざしてきました。その結果、中京区基本計画（第2期）の計画期間の10年間で大きくまちづくりが進展しています。

しかし、この間も、中京区を取り巻く状況は、急速に変化しています。近年、特に問題視されている地球温暖化に起因し、気候変動に伴って頻発化・激甚化する自然災害や、新型コロナウイルス感染症をはじめとするさまざまな感染症対策など、国や地域を問わず、克服すべき人類共通の課題から社会全体がより良く立ち直るには、「SDGs（※1）」の達成をめざすとともに、都市の「レジリエンス（※2）」を高めることも重要になってきています。

また、新型コロナウイルス感染症の影響により、従来までの社会システムや産業構造、ひとびとの生活様式や行動、意識は大きな変革を求められており、わたしたちは、ICT（情報通信技術）やIoT（※3）、AI等といった最先端技術を取り込みながら、新たな社会のあり方や社会的価値の創造に向かって歩み始めています。また、急速なグローバル化の進展は、ヒトやモノ、情報等が国境を越えて行き来する時代を到来させましたが、一方で、自然災害の頻発や健康被害、食糧危機など、わたしたちの生活を脅かす地球温暖化の加速化や新型コロナウイルスをはじめとする世界的な感染症の拡大を完全に抑制することを困難にしています。

これから先の社会やまちづくりにおいては、こうした脅威に対して、柔軟に対応していくことが求められるだけでなく、これから先の社会やまちがどう変わっていくのかについて、区民の皆さんとともに考え、それらに備えることが欠かせません。

第3期となる本計画においては、これまでの取組のよい点を継承していくだけでなく、こうした中京区を取り巻く状況が急速に変化していることを再認識し、新しい社会像や価値の創造に向かって、区民の皆さんとともに歩んでいくことが重要となります。

※1 「SDGs（持続可能な開発目標）」

平成27（2015）年の国連サミットで採択された、令和12（2030）年までを期間とする国際目標。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットを定めたもの

※2 「レジリエンス」

震災や人口減少等のさまざまな危機を乗り越え、バネのように粘り強くなって元に戻りながら、以前よりもより良く立ち直る状態を意味するもの

※3 「IoT」

「Internet of Things」の略であり、あらゆるモノがインターネットにつながり、相互に通信し合う技術

そこで、地球温暖化や人口減少、新型コロナウイルス感染症をはじめとするさまざまな危機と対峙する新たな時代背景において、重要なキーワードである「SDGs」や「レジリエンス」、さらには厳しい財政状況も踏まえ、3つの「めざすべき将来像」と、これらを実現させるための具体策として、「目標実現に向けた戦略」として7つの「まちづくり戦略」を設定します。

そして、計画の具体化に当たっては、各戦略を個々に進めるだけではなく、互いに関連させ、一体となった推進をめざします。

めざすべき将来像

将来像 1 人	コミュニティの活性化と交流の促進 ● 自治会・町内会をはじめとした地域活動の担い手を増やすなど、地域コミュニティの活性化と交流の促進に取り組んでいきます。 ● 誰一人孤立させない地域社会をめざし、すべてのひとがお互いを尊重し、認め合い、共生できるまちづくりを進めていきます。 ● 地域全体で子育てを応援するなど、若い世代が安心して子育てできるまちづくりを推進していきます。
将来像 2 文化	地域個性の継承と創造 ● 地域ごとの豊富な歴史的・文化的資源を守り、次世代へ継承するとともに、地域の個性を生かしたまちづくりに取り組んでいきます。 ● 企業や大学など、多様な主体が活躍できる環境づくりを進め、スタートアップ・エコシステム(※1)を形成することで、社会課題の解決や新たな価値の創造によるにぎわいづくりに取り組んでいきます。
将来像 3 まち	次世代につなぐくらしと環境の創出 ● 災害や犯罪、感染症等の日常生活を脅かすあらゆる脅威に対応すべく、「地域力」、「区民力」を結集・発揮した安心・安全なまちづくりを進めていきます。 ● 2050年までの二酸化炭素排出量「正味ゼロ」に向け、さらなる省エネ、ごみ減量の普及はもとより、エシカル消費やRE100(※2)など、区民ひとりひとりが生活を見直し、環境負荷を低減させる持続可能なライフスタイルへの転換に取り組んでいきます。

※1 「スタートアップ・エコシステム」

複数のスタートアップ企業や、大企業、投資家等の多様な関係者が結びつき、循環しながら広く共存共栄していくしくみ

※2 「RE100」

事業者等が事業運営に使用する電力を100%再生可能エネルギーで賄うことをめざす取組の総称

まちづくりの目標

「響きあう 人・まち・文化 中京区」
 ～わたしが創る ふれあいとにぎわいのまち～

まちづくりの課題

重点課題1 地域交流の促進

- 地域のつながりの希薄化
- 福祉的課題の複合化・深刻化
- 教育・子育てに対する意識の变革

重点課題2 文化とにぎわいの創出

- 地域文化の継承の危機
- にぎわいの継続に向けた社会変化への対応
- 産学公との連携と市民協働の拡充
- 社会課題解決に向けた企業活動との連携

重点課題3 持続可能な暮らしの実践

- 迫りくる災害や感染症への備え
- 通りの復権と歩いて楽しいまちなかの創出
- 市民生活を最重視した持続可能な観光の模索
- 環境に配慮したライフスタイルの確立

めざすべき将来像

【将来像1】

コミュニティの活性化と交流の促進

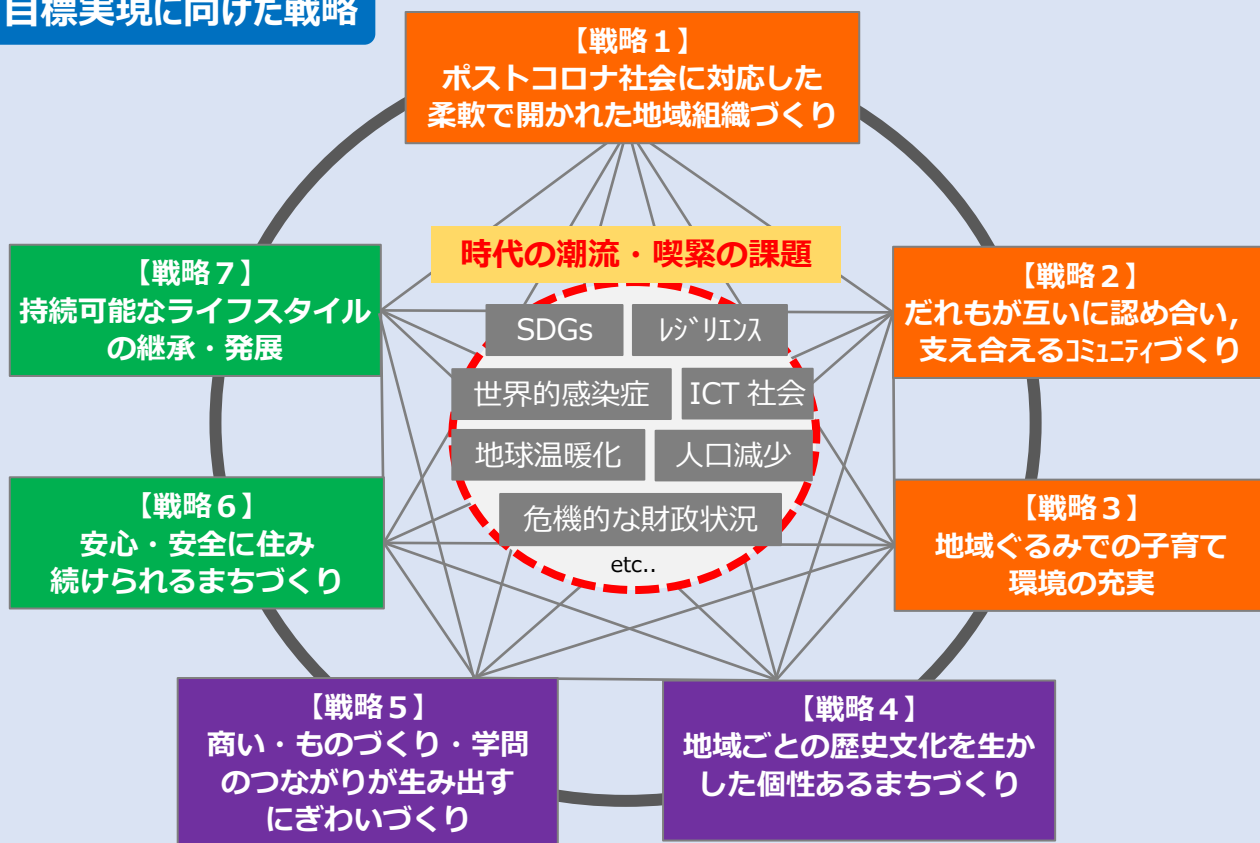
【将来像2】

地域個性の継承と創造

【将来像3】

次世代につながるしと環境の創出

目標実現に向けた戦略



まちづくりの目標

「響きあう 人・まち・文化 中京区」

～わたしが創る ふれあいとにぎわいのまち～

写真・イラスト

第4章 目標実現に向けた戦略

まちづくり戦略1

ポストコロナ社会に対応した柔軟で開かれた地域組織づくり

中京区は、地域住民が主体的にまちづくりに取り組むという自治意識を脈々と受け継いできました。しかし、近年は、ひととひとのつながりが希薄になりつつあり、地域コミュニティ活動への参加が減少している傾向にあります。また、新型コロナウイルス感染症の拡大を機に新しい地域活動のあり方が模索されています。

中京区の住民自治の歴史と伝統のなかで培われた「地域力」を未来に引き継いでいくために、自治会・町内会の活動を支援し、地域コミュニティの活性化を推進していきます。

① 開かれた地域組織づくりと新しい地域活動の模索

持続可能で活力あるまちづくりをめざして、開かれた地域組織づくりや地域情報の発信力強化に向けたさまざまな取組を支援します。また、オンライン会議の導入など、ICT（情報通信技術）を積極的に活用した新しい地域活動を支援します。

<主要な取組>

- ・ 自治会等の活動内容や地域の魅力等の情報発信の支援
- ・ 自治会・町内会におけるSNS等を活用した先進的な情報発信事例の紹介
- ・ 地域活動におけるスマートフォン活用講座等の開催

② 自治会・町内会への加入率の向上

地域コミュニティの基盤となる自治会・町内会に加入する意義や加入してよかった点等の事例をわかりやすく発信することにより、自治会・町内会への加入と地域活動への参加の促進を図ります。

<主要な取組>

- ・ 自治会等の役割や地域活動についての効果的なPRの実施
- ・ 自治会等の活動内容や地域の魅力等の情報発信の支援（再掲）
- ・ 自治会・町内会の加入率向上や地域コミュニティへの参加促進に向けた取組への支援

③ 居住形態を超えた地域交流の促進

中京区では、マンション居住の区民が増えていますが、こうした居住形態にかかわらず、だれもがご近所との付き合いの大切さを再認識し、地域のまちづくりに積極的に参加したくなるような取組を支援します。

<主要な取組>

- ・ 各学区のマンション防災活動への支援
- ・ 自治会等に参加していない住民と参加している住民の交流事業への支援
- ・ 自治会・町内会への加入に向けた地域とマンション等の開発事業者との連携の促進

④ 子ども・若者の地域参加と次世代の担い手の育成

子どもから高齢者まで、だれもが一緒に楽しく参加できるスポーツや文化活動，

地域の祭り等を通して世代間交流を促進するとともに、若者にさまざまな行事の運営に参画してもらうことで次世代の担い手を育成し、地域コミュニティの活性化を図ります。

<主要な取組>

- ・ 体育振興会によるスポーツ事業や地域の文化活動への支援
- ・ 地域の歴史文化が体験できる地域の祭りや行事等への子どもや若者の参加促進

⑤ 新たな担い手の発掘と活躍できる場づくり

地域の個々人が培ってきたスキルや経験等を自治会組織の運営に生かすことで、さらなる地域住民の参加を促す好循環の流れにつながるよう、新たな担い手の発掘と活躍できる場づくりを進めます。

<主要な取組>

- ・ 中京区版「地域人材バンク」など、スキルや経験等をもつひとが活躍できるしくみの検討
- ・ 地域の歴史文化が体験できる地域の祭りや行事等への子どもや若者の参加促進（再掲）

⑥ 地域組織の新しいあり方の模索

地域コミュニティの担い手の不足や長寿化が進む中、地域の枠組みを超えて連携の輪を広げることで課題解決を図ろうとする動きを支援していくことにより、「地域組織の新しいあり方」を模索するとともに、地域コミュニティの活性化を推進します。

<主要な取組>

- ・ 自治会・町内会、学区、校区、行政区等のさまざまな単位での地域交流の促進
- ・ NPO、事業者、大学等の多様な主体との連携の促進
- ・ 大学との包括協定を生かした学生が地域課題の解決に取り組むしくみの検討

【ココに注目！ 戦略1実現のポイント】

この戦略実現のためのポイントは、区民の皆さんひとりひとりがお住まいの地域への愛情や関心をもって、何がしかのまちづくり活動に参加いただくことです。

自治会や町内会への加入や活動については、時間の制約や、新旧住人同士のコミュニケーションの取り方など、参加しづらいと感じておられる方もおり、また、「忙しいから無理」、「わたしには関係ない」という意見もあります。しかし、お住まいの地域のイベントや集まりに参加してみれば、思った以上に地域との絆が生まれるのではないのでしょうか。

そもそも自治会や町内会は、とても大切な役割を担っています。もしも自治会や町内会がなかったら、ごみの収集場所が決まらず家の前にごみ袋が放置されたり、地震で自宅が壊れても避難所が開設されるのは数日後になる可能性もあります。「面倒なことはだれかがやればいい」というひとばかりになれば、安心してくらするまちを築くことはできません。

だからこそ、心地よくくらするまちの生活を根本から支えていくために、まずは一度、自治会や町内会の活動に参加してみてください。子育て世代のファミリーがたくさん参加している手作り市やバザー、子どもから高齢者まで一緒に参加できる美化活動、さらには地元のお祭りなど、仕事帰りや休日に気軽に参加しながら、どんなひとが同じ地域でくらすしているのか、地域がどんな活動を通して安心・安全を守っているのか、またお互い支え合うことが何かないか等々……。きっとまちの見え方が変わると思います。

まちづくり戦略2

だれもが互いに認め合い、支え合えるコミュニティづくり

少子化や長寿化、家族形態の変化等を背景に、地域の福祉的課題は複雑化、複合化しています。こうした課題を抱えたひとが、地域や社会から孤立することがないよう、地域のつながりのなかで、より多くの区民が支え合いにかかわることができる地域づくりが求められています。とくに新型コロナウイルス感染症の拡大に際しては、地域活動が縮小されたことで、社会的に弱い立場にあるひとがますます孤立化したことから、地域のつながりの重要性が改めて浮き彫りになりました。

中京区の強みである地域力を基盤として、世代や分野を超えて、すべてのひとや団体が、それぞれのくらしや活動のなかで、生きがいとともに創り、お互いを尊重し合うことのできる、だれもが健やかでいきいきと笑顔あふれる地域共生社会の実現をめざします。

① 地域で取り組む健康長寿のまちづくり

ひとりひとりが正しい知識を持ち、それぞれのライフステージや状況に応じて、主体的に健康づくりに取り組める環境づくりを進めます。また、「新しい生活スタイル」にも対応した食育や運動等の健康づくり活動を支える地域のボランティアリーダーの育成や活動の充実を図り、区民がお互いに高め合う地域ぐるみの健康づくりを推進します。

<主要な取組>

- ・ フレイル（※）対策など、健康づくりに関する情報発信、学習会の開催
- ・ 地域の福祉団体や体育振興会が取り組む健康づくりの取組への支援
- ・ 地域で健康づくりの活動を支援するボランティアの育成

② 人権文化の息づくまちづくり

最近ではインターネット上での人権侵害や新型コロナウイルス感染症をはじめとした感染者患者への差別や偏見等の新たな人権問題が顕在化しています。男女共同参画や障害者福祉の推進など、これまで行ってきた地域ぐるみの取組を一層推進することで、ひとりひとりが日々のくらしのなかでお互いを認め合い、多様性を尊重する人権文化の息づくまちづくりを推進します。

<主要な取組>

- ・ 人権文化の構築に向けた情報発信の充実
- ・ 人権擁護委員と連携した相談体制の強化や啓発の実施

※ 「フレイル」
加齢により心身が衰えた状態。ただし、早期に対策を行えば元の健常な状態に戻る可能性がある。

③ 誰一人孤立させない地域づくり

ひきこもり、8050 問題（※）、生活困窮など、地域にはさまざまな理由で、生きづらさを抱えているひとがいます。誰一人孤立のない地域をめざし、地域で当事者の課題に「気づき」、「関心を持ち」、「互いに認め合える」関係をつくり、地域での支え合いの充実や公的支援・サービスに円滑につなぐことのできる、お互いに助け合えるコミュニティづくりを推進します。また、コロナ禍で普及が進む ICT（情報通信技術）を活用した支援やコミュニケーション等に対応できないひとが取り残されないよう取り組んでいきます。

<主要な取組>

- ・ 当事者の課題への理解と意識の向上につながる啓発の実施
- ・ 地域の福祉団体等が取り組む見守り活動への支援
- ・ 地域における福祉活動の担い手の育成

④ 世代を超えた地域交流の促進

共働き世帯が増え、世帯人数が減少する中、親の介護と子育てを同時に抱えるなど、複雑化、複合化する生活課題に個々の家庭だけで対応していくことは難しくなっています。地域全体で支え合う相互扶助の実現をめざし、身近な地域の顔が見える関係づくりにつながる「世代を超えた地域交流」を促進します。

<主要な取組>

- ・ 地域における交流の場づくりや交流事業への支援
- ・ 地域における支え合い活動の周知・啓発の推進

⑤ 支援者ネットワークの強化と連携

多様化する地域の福祉ニーズに対応するには、障害者福祉、介護、子育て等の各分野で活躍する関係者が連携していくことが重要です。中京区地域福祉推進委員会が進める「福祉のまちづくり体制整備事業」など、既存の関係者の連携を深め、ネットワークを強化するとともに、大学、企業、NPO 等の多様な主体との連携、協働を促進します。

<主要な取組>

- ・ 支援者ネットワークの強化と連携による分野横断的な支援体制の充実
- ・ 多様な主体が連携・協働して取り組む活動への支援

⑥ 将来の担い手を育み、コミュニティをつないでいく学びの場づくり

今後より一層、地域における相互扶助が重要になってくる中、現在の福祉的課題への対応と並行して、将来の担い手を育成していくことが重要です。子どもや若者も含めた次の世代の担い手が、当事者と出会い、課題に気づく機会をつくっていくことで、地域で育まれてきた支え合いのコミュニティを継承していきます。

<主要な取組>

- ・ 学校や地域団体等と連携した子どもたちへの学びの機会の創出
- ・ 地域における福祉活動の担い手の育成（再掲）

※ 「8050 問題」

80 代の親とひきこもり状態の 50 代の子が同居する世帯の孤立化・困窮化に伴うさまざまな問題

【ココに注目！ 戦略2実現のポイント】

「人権」や「福祉」はとても身近な問題です。女性、子ども、高齢者、障害のあるひと、LGBT、外国人等に対する差別や虐待など、さまざまな問題があります。さらに最近では、だれもが安易に書き込めるインターネット上での誹謗・中傷といった、新たな問題も起こっています。

こうした問題は「自分には関係ない」と思っているひとも多いと思いますが、だれもが差別する側、される側のどちらの当事者にもなってしまう可能性があります。

「差別してはいけない」ということは当たり前のことですが、中には、誤った「正義感」や「慣習」から無自覚に差別をしてしまっている事例もあります。新型コロナウイルス感染症の拡大で社会に不安が広がる中、防衛本能が過剰に働き、やむを得ない理由で帰省するひとやマスクをしていないひとを攻撃する「自粛警察」や「マスク警察」と呼ばれる行動が問題になりました。行動に移す前に少し立ち止まり、自分の行為がもたらす影響の大きさや相手の立場に立って考えることのできる「想像力」をもつことができれば、こうした問題の多くは防ぐことができるのではないのでしょうか。

人間は社会的存在であると言われています。ひとりひとりが、日々のくらしのなかでお互いのことを知り、認め合い、助け合っていくことが大切です。社会をつくるのは、ひとりひとりの意識や行動です。だれにとっても住みよい地域を一緒につくっていきましょう。

まちづくり戦略3

地域ぐるみでの子育て環境の充実

子育てをめぐるっては、世帯規模の縮小や地域コミュニティの希薄化等による保護者の孤立化、仕事と子育ての両立の難しさなど、さまざまな課題があります。

地域ぐるみで子育て支援体制を強化するとともに、子どもたち自身の成長や子育てを通じた保護者の学びを後押しすることで、保護者が不安を抱えず楽しみながら子育てができる環境づくりを進めます。

① 安心して子育てができる環境づくり

安心して子どもを生み育てていく環境をつくるには、子育てをする保護者の不安や悩みを解消し、負担を減らしていくことが必要です。子どもを生み育てることの素晴らしさを、将来、親となる世代も含め社会全体が実感できるよう普及啓発に取り組むとともに、地域団体や関係機関、大学等とも連携しながら妊娠から出産、育児まで切れ目のない支援体制の充実を図ります。

<主要な取組>

- ・ 子育てに関する情報発信・講座の充実
- ・ 不妊・不育への支援，妊産婦・新生児の家庭訪問や ICT（情報通信技術）の活用も含めたさまざまな機会での相談など，子育て支援体制の充実
- ・ 子育て世代が交流できる機会の提供

② 地域における子育て支援活動の活性化

中京区には、子どもたちを「社会の宝」として地域全体で育てていく，といった「人づくりの伝統」が脈々と受け継がれ，今も地域に根付いています。子育てサロン等地域主体の子育て支援活動の活性化を図り，地域全体で子育て家庭を温かく見守り，支え合う，子育てしやすいまちづくりを推進します。

<主要な取組>

- ・ 保健師や保育士等の専門職の派遣や大学等との連携による地域の子育てサロンへの活動支援
- ・ 地域の子育て支援団体やボランティア団体への活動支援

③ 子どもの学びを応援する多様なしくみづくり

子どもたちが健やかに育ち，社会のなかで生きる力を身につけていくには，子どもの頃から地域社会の一員として愛され，多様な世代との交流のなかで社会のルールや支え合いの気持ちを身につけていくことが重要です。学校や関係機関との連携の下，地域における子どもたちの居場所の確保やスポーツ，伝統文化，防災等さまざまな地域行事への参加を支援することで，次代を担う子どもたちの学びを後押しします。

＜主要な取組＞

- ・ 学校を拠点とした地域における子どもの居場所づくりの推進
- ・ 地域行事への子どもたちの参加促進

④ 子育てから広がる学びの環境づくり

子育ては、次世代の担い手を育むだけではなく、保護者にとっても子育てを通じた学びの機会であり、新たなことに挑戦し、知識を広げるきっかけとなります。子育て世代の交流促進や親子で一緒に参加できるイベントの実施等により、親子とともに学び、成長できる環境づくりを進めます。

＜主要な取組＞

- ・ 親子で区内の歴史や文化を学べる機会の提供
- ・ 子育て世代が交流できる機会の提供（再掲）

⑤ 子育てネットワークの充実

子育て世帯の孤立化をはじめさまざまな課題に対応するには、地域団体、NPO や福祉団体、学校等関係者の連携が重要です。子育てを支援する関係機関の連携を深め、ネットワークの充実を図るとともに、大学や事業者等の多様な主体との連携、協働を促進していきます。

＜主要な取組＞

- ・ 関係機関・団体のネットワークの強化とさらなる連携の拡大
- ・ 地域の子育て支援活動と多様な主体の連携促進

【ココに注目！ 戦略3実現のポイント】

「子育て」は、子どもと一緒に時間を楽しむことでさまざまなことを一から勉強し直し、自分も成長できる機会でもあります。最近では男性が「子育て」を楽しみながら、自身の興味の幅を広げ、人生を謳歌する「イクメン」という言葉も定着してきました。

しかし、核家族化の進展等により頼れる方がおらず、夜泣きが続いて睡眠不足になったり、言うことを聞かない我が子に困り果てたりしたときは、どうすればいいのか悩むことも多いと思います。

そんなときは思い切って周りのひとに相談してみてもはどうでしょう。何も「子育て」の悩みは親だけで抱え込む必要はないのです。子育ての大先輩である隣のおばあちゃんや「公園デビュー」をきっかけに子どもを介して知り合った近所のひとなど、中京区には子どもたちを「社会の宝」として地域全体で育てていく伝統が今も根付いています。

そして、子どもの成長には周囲からの働き掛けが欠かせません。たとえば、近所の子どもたちにあいさつすることも立派な「子育て」のひとつです。あなたのちょっとした行動が、子どもたちを健やかに育て、子育て家庭を支えることにつながります。

地域で子どもたちを温かく見守るまちづくりが進めば、女性の生き方や子どもたちの可能性も広がり、家族のあり方や地域とのかかわり方も豊かになります。自分の子どもがいるひともいないひとも、だれもが「子育て」に参加することで、社会全体で子どもたちを育てていきましょう。

まちづくり戦略4

地域ごとの歴史文化を生かした個性あるまちづくり

中京区では、地域ごとに伝統行事が脈々と受け継がれてきたことで、まちに一体感が醸成され、地域のまとまりが生み出されてきました。また、かど掃き・打ち水等のくらしの文化や地域の伝統産業とも一体となり、京町家や「通り」が織りなす個性豊かな景観を形成しています。

こうした区民が誇りとし大切にしてきた「地域の宝」を未来に継承するとともに、地域の個性を生かしたまちづくりに取り組んでいきます。

① 歴史文化の再発見と継承

地域の歴史文化は、地域の誇りであり、地域の個性や特徴を体現しています。子どもたちが地域に息づく歴史や、くらしの中に継承され根付いている文化を再発見し、身近に感じる機会をつくるなど、それらに愛着を持ち、守り、育てるきっかけになる取組を行うことで、地域の歴史文化を次の世代へと継承していきます。

<主要な取組>

- ・ 地域のくらしの文化に関する学習会やイベントの実施
- ・ 親子で地域の祭りを楽しめる取組への支援
- ・ 地域の祭りや伝統行事に関する情報の収集と発信

② 地域個性の再認識と発信

中京区の豊富な歴史文化は、長い年月のなかで多くの来訪者との交流により育まれてきました。こうした地域の個性を再認識するとともに、だれもが憧れ、移り住み、住み続けたいと思えるまちをめざし、その担い手や守り手を支援するとともに魅力を内外に発信する取組を推進します。

<主要な取組>

- ・ 地域の文化資源を巡るまち歩きツアーの実施
- ・ 元離宮二条城をはじめとする地域の歴史遺産や文化の担い手支援と魅力の発信
- ・ 地域の魅力を発信する担い手の発掘と活躍の場づくり

③ 伝統産業の活性化

華道等文化活動が盛んな中京区では、文化や芸術と密接に結びつきながら、日々のくらしの中に伝統産業品が溶け込んでいます。区民が気軽に「作り手」である職人の匠のわざや心に触れ、伝統産業をより身近に感じる機会をつくることで、「ホンモノ」があるくらしを次の世代に継承していきます。

<主要な取組>

- ・ 伝統産業を体験・見学できる工房見学ツアーの実施
- ・ 現代の生活に伝統産業品を取り入れる実践例の発信

④ 歩いて楽しいまちなかの創出

四季の移ろいを大切にするくらしの文化が根付く中京区では、「通り」はくらしや催事が営まれるひとびとが集い華やぐ舞台です。安心・安全、快適で魅力的なまちなかをめざす「通りの復権(※)」の取組を進め、区民はもとより訪れたひとのだけれもが、歩いて楽しいと実感できるまちづくりを推進します。

<主要な取組>

- ・ 「通り」やくらしの文化に関する情報の発信
- ・ 地域の団体や学校と連携した「通り」の安全を確保する取組の推進

⑤ 景観を生かしたまちづくり

京町家等の建物や緑がある美しい町並みは、長い年月をかけて地域の歴史や文化と一体となり形成されてきた「地域の宝」です。各地域で行われてきた調和のとれた景観保全の活動に学び、先人たちの残した貴重な財産を次代に引き継ぐ取組を推進するとともに、まちの魅力や活力を高める新たな景観の創造をめざし、対話と協働のまちづくりを進めていきます。

<主要な取組>

- ・ 地域景観づくり協議会の活動など、地域で展開される取組の発信
- ・ 町並みを生かした交流事業の支援

【ココに注目！ 戦略4 実現のポイント】

この戦略を実現するには、ひとりひとりがお住まいの地域の歴史文化を日常生活のなかで「楽しむ」ことが重要です。

たとえば、節分、七夕等の年中行事や地域の祭りは今もわたしたちのくらしに根付いています。これらは、わたしたちが日常生活を送るうえで、季節の移り変わりを身近に感じ、より深く楽しむために欠かせません。

また、現在では伝統産業品は、特別な行事に用いられるものというイメージが強く、普段の生活ではあまり馴染みがないかもしれませんが、以前は各家庭で身近なものとして、日々のくらしのなかで使われていました。

地域の歴史文化や季節ごとの行事、伝統産業品の由来等を調べてみれば新たな発見があり、実際に参加してみたり、使ってみれば、日々のくらしがより深く、豊かで楽しいものになるかもしれません。

最初は、食卓に一輪の季節の花を飾る、献立に一品だけでも旬のものを取り入れる、地域の祭りに参加してみる、扇子を使う時には京扇子を選んでみるなど、歴史や文化を少しだけ意識し、日常生活の中に楽しく取り入れることから始めてみてはいかがでしょうか。

※ 「通りの復権」

中京区では、区民のくらしや生業、催事や伝統が古くから「通り」で営まれてきましたが、現在では「通り」が単なる通過空間になってしまっています。そのため、クルマ中心のライフスタイルからの転換を図り、安心安全に往来できる、区民の日々のくらしや生業の空間としての魅力ある「通り」の復権をめざした取組を進めています。

まちづくり戦略 5

商い・ものづくり・学問のつながりが生み出すにぎわいづくり

中京区は、市内で最も多くの事業所がある経済活動の中心地であり、魅力的な個店で構成された商店街の活動が活発な地域です。地域に根差して活動する地域企業も多く、さらに、近年は、社会的な課題解決をめざすソーシャルビジネスを展開する企業やスタートアップ（※1）、起業する学生の活躍も増えています。

今後も多様な主体が活躍する中京区の強みを最大限に発揮し、ポストコロナ社会への対応も含め地域や社会のさまざまな課題の解決に取り組むなかで、スタートアップ・エコシステム（※2）の形成による全国に発信できるような、先導的な課題解決のモデルづくりにも挑戦していきます。

① 魅力ある個店の集積を生かしたまちづくり

魅力的な個店が集積する中京区では、事業者が互いに切磋琢磨し、「京もの」に代表される質の高い商品が提供されてきました。地域に根付く目利きの力によって、事業者を応援する文化を継承していくことで、「にぎわいと華やぎのある都心商業」の振興を図ります。

<主要な取組>

- ・ 伝統産業体験など、次の世代を担う若者の目利き力を養う取組の推進
- ・ 新たな魅力を創造する若手事業者や老舗の挑戦的な取組の発信

② 協働による商店街の活性化

商店街は、区民の日常の暮らしを支えるとともに、地域住民、学生、事業者等多様なひとびとが集まるコミュニティの場として、地域の祭りや行事の継承・発展にも大きく貢献してきました。コロナ禍で、商店街の果たす役割にますます期待が高まる中、商店街を核とした協働の取組を支援することで、にぎわいのあるまちづくりを推進していきます。

<主要な取組>

- ・ 商店街が学生や地域住民を巻き込んで実施するまちづくり活動への支援
- ・ 区民の暮らしを支える商店街の利用の呼びかけやにぎわいづくりへの支援

③ 大学との連携

「大学のまち京都・学生のまち京都」では、国内外から集まる学生がキャンパスを飛び出すことで学びを深めるとともに、まちの活性化に貢献してきました。大学の有するひと、知識、情報等の資源をまちづくりに生かすべく、地域団体や産業界との連携を促進していきます。

<主要な取組>

- ・ 市民講座等大学の実施する地域貢献イベントとの連携
- ・ 大学の教育・研究活動や地域活動を望む学生と地域団体等とのマッチング

※1 「スタートアップ」

新しいビジネスモデルで急成長をめざす新興企業

※2 「スタートアップ・エコシステム」

複数のスタートアップ企業や、大企業、投資家等の多様な関係者が結びつき、循環しながら広く共存共栄していくしくみ

④ 地域企業との連携

中京区内には地域の祭りや福祉等の地域活動を支える企業が多数存在し、まちづくりの担い手として活動しています。こうした地域企業の取組を見える化することで、地域内雇用につなげるとともに、環境や防災等地域で活躍する NPO 等の市民活動との連携を図ることで、企業のまちづくり活動へのさらなる参画を促進します。

<主要な取組>

- ・ 次代を担う若者が地域企業と交流する機会の創出
- ・ 地域企業が新たな商品・サービスを開発するきっかけとなる NPO、地域住民、学生とのオープンな対話の場づくり

⑤ スタートアップ・エコシステムの形成と社会課題解決型ビジネスの集積

近年、中京区内ではスタートアップや社会課題解決を目的に新しい事業を展開する社会的企業が活躍しています。産学公連携に市民も加えた多様な主体が協働できる場づくりを進めることで、スタートアップ・エコシステムを形成するとともに、地域課題や社会課題の解決につながる多くの新しいビジネスアイデアが生まれるまちをめざします。

<主要な取組>

- ・ 社会的企業との連携によるイチバンボシギフト等の事業の推進
- ・ 地域課題や社会課題解決のための多様な主体が集い協働・協創する場の創出

【ココに注目！ 戦略5実現のポイント】

社会のさまざまな課題の解決につながる新たな発想やアイデアを生み出すには、ひとりひとりが日常生活の些細な疑問や発見、気づきを大切にするとともに、それを皆と共有することが重要です。

たとえば、企業のヒット商品の中には、お客さんの声から生まれたものがたくさんあります。まちの商店でも、お客さんの反応や気づきが、新たな商品やサービスを生み出すことに役立ち、高い品質を維持することに貢献してきました。

また、まちづくりの分野でも、「まちの復興が進んだ」、「商店街が活性化した」等の成功事例の中には、「若者」や「よそのひと」のかかわりがポイントとして挙げられていることがあります。周りのひとと違った視点や発想から生まれた斬新なアイデアや意見が、解決困難と思われた課題を突破するきっかけとなり、多くのひとの共感を呼び、大学や企業をも巻き込んだ大きな動きを生み出した事例もあります。

ポストコロナ社会への対応をはじめ、今後も地域や社会には解決すべき課題が山積しています。今までの常識ではありえない事態も起こってくるでしょう。こうした課題を解決するには当事者や専門家だけでは行き詰ってしまう場合もあります。そんなときには異なる分野の意見や閃きを取り入れた発想の転換が必要です。だからこそ、ひとりひとりの気づきは、大切な宝の種なのです。

まちづくり戦略6

安心・安全に住み続けられるまちづくり

中京区は、平安建都以来、戦乱や災害、疫病等のあらゆる危機を乗り越え、地域の結束力に磨きをかけてきましたが、現在においても、防犯や防災、感染症対策、交通安全、空き家対策等のさまざまな課題に直面しています。こうした課題を克服するには、多様な主体が相互に連携・協力し、協働することが必要です。

中京区が誇る、高い「地域力」、「市民力」を結集・発揮することで、今後もだれもが経験したことのない危機的状況が起こったとしても、安心・安全に住み続けられるまちづくりを推進します。

① 安心・安全ネットワークの充実

安心・安全な地域づくりには、地域住民、事業者と区役所、警察、消防、学校等の関係機関の連携が欠かせません。防犯や防災、感染症対策、子どもの安全、地域福祉等の幅広い分野で、それぞれの組織の強みを生かした取組を展開することで、地域の安心・安全ネットワークの充実を図り、多様な課題に柔軟に対応できるまちの実現をめざします。

<主要な取組>

- ・ 区内の関係機関と地域、事業者が連携した安心・安全の取組の実施
- ・ 地域における防犯活動や見守り活動への支援

② 防災・減災に向けた日常的な協力関係の構築

災害発生時は、自分自身の身を守る「自助」とともに、近所のひとたちと協力しながら地域の安全を守る「互助」や「共助」の取組が重要です。日ごろから住民同士の顔が見える関係づくりを後押しするとともに、自治連合会・自主防災会や消防団等によるまちの危険箇所の対策や避難所運営訓練など、地域における防災・減災の取組の支援を強化します。

<主要な取組>

- ・ 感染症の影響も想定した防災対策の確立と地域住民による実践型防災訓練の開催支援
- ・ 要配慮者（乳幼児や妊産婦、高齢者、障害者等）の避難支援の取組の促進

③ 歩行者優先のまちづくりと交通マナーの確立

安心・安全で、日々のくらしや生業の空間として魅力的なまちなかをめざす「通りの復権」を実現するには、まずはクルマ中心の単なる通過空間ではない「歩くこと」を中心としたまちに転換することが重要です。

歩行者優先のまちづくりをめざし、クルマや自転車の交通ルールへの順守やマナー向上の取組を推進します。

<主要な取組>

- ・ 親子で楽しく交通ルールやマナーを学べるイベントの開催
- ・ 地域の団体や学校と連携した「通り」の安全を確保する取組の推進（再掲）

④ 観光客へのマナーの普及

中京区には、国内外から多くの観光客が訪れる一方、京都の文化や習慣に対する理解が十分に浸透していないため、トラブルが発生するケースも見られます。ポストコロナを見据え、旅行事業者や宿泊事業者等の関係者と連携し、観光客へのマナーの普及を図ることで、市民生活を最優先に、安心安全、豊かさの向上、地域文化・コミュニティの継承・発展につながる「市民生活・地域コミュニティと観光の更なる調和」を推進します。

<主要な取組>

- ・ 観光資源の魅力の背景にあるくらしの文化の発信
- ・ 関係者と連携した外国人観光客に対するマナー情報の発信

⑤ 空き家活用の促進

老朽化した空き家の放置により、生活環境や景観の悪化、防犯・防災上の課題が生じています。一方で、空き家は、将来の住まいやオフィスなど、まちの活力を生み出す貴重な資産にもなります。課題解決のために、必要な情報の発信を強化するなど、空き家の活用と解消を促進していきます。

<主要な取組>

- ・ 司法書士等の専門家と連携した情報発信
- ・ 空き家の適正管理対策と活用に取り組む地域への支援
- ・ 区役所での空き家等活用相談窓口の実施

【ココに注目！ 戦略6実現のポイント】

この戦略を実現するには、ひとりひとりが事前にできることを考え、備えておくことが重要です。

全国各地で大規模な災害が相次いでいます。御自身や知人が過去に被災したことがある方もいらっしゃるかもしれません。被災の経験がない方も、自然災害が頻発する今日の日本ではつねに被災者になる可能性があります。また、事件・事故もだれにでも起こりうることで、一方では被害に遭われた方からは「まさか自分が被害に遭うとは思っていなかった。」という声が多いのも実情です。災害や日常生活の危険について最悪の事態を想定し備えておくことは、自分自身や大切な家族を守るために必要です。

最近は、備蓄やハザードマップの確認など、事前の備えをされている方が増えています。また、地域の訓練に参加し役割分担を決めておくなど、「互助」、「共助」を意識した活動にも関心が高まっています。このように、ひとりひとりが事前にできることを考え、普段から周りのひとと協力して取り組んでいくことはとても重要です。また、災害対策だけではなく、交通事故や防犯対策、空き家の問題でも、事前に危険個所の把握や改善に努め、隣家と日常的なコミュニケーションを図るなど、トラブルを未然に防ぐためにできることがあります。

「安心・安全」は、わたしたちのくらしや生命に直結する重要な問題です。いくら備えても、備え過ぎるということはありません。また、最終的にみずからのいのちを守るのは自分自身ですが、ひとりでは限界もあります。普段から隣近所や地域のなかでお互いに助け合えるよう、「顔の見える関係」をつくっていきましょう。

まちづくり戦略7

持続可能なライフスタイルの継承・発展

地球温暖化は、自然災害の頻発や健康被害、水や食料不足に加え、生物多様性の損失をもたらすなど、わたしたちの暮らしにとって大きな脅威になりつつあります。50年後・100年後も持続可能なまちであり続けるには、ひとりひとりがこれまでの生活を見つめ直し、環境負荷を低減させるための具体的な行動を実践していくことが必要です。

2050年までの二酸化炭素排出量「正味ゼロ」に向け、国内外から多くのひとが訪れる、伝統と進取の気風をもつ中京区から、環境に配慮したライフスタイルやまちなか緑化の取組を推進し、広く発信していくことにより、持続可能な社会の実現に貢献します。

① より環境負荷の低い消費・販売・生産活動への転換

限られた資源を有効利用し、持続可能なまちづくりを推進していくには、大量生産・大量消費・大量廃棄の社会構造を転換していくことが求められています。また、コロナ禍で停滞した社会や経済をより良く立て直すには、地球温暖化の防止と消費・販売・生産活動の両立を図ることも重要です。

生産から消費、廃棄まであらゆる段階での意識と行動の変革をめざし、食品ロス対策をはじめとした2R※1）及びリニューアブル※2）や省エネルギー等の取組を事業所の集積する中京区から推進していきます。

<主要な取組>

- ・ エシカル消費（倫理的消費）※3）など、環境に配慮した消費行動の普及啓発
- ・ 家庭・事業所での省エネルギーの取組促進

② 昔ながらのくらしの知恵の再発見

通り庭等のさまざまな工夫が施された京町家や、ものを大切にする「しまつの心」など、中京区には、快適に過ごすための「くらしの知恵」が受け継がれています。こうした先人の知恵に学ぶとともに現代の最新技術との融合を図っていくことで、無理なく、少しの手間や工夫で環境負荷を抑えた快適なくらしの実現をめざします。

<主要な取組>

- ・ しまつの心やおばんざいの食文化など、「くらしの知恵」の発信
- ・ 家庭や地域で実践されているエコ活動の先進事例の発信

※1 「2R」

そもそもごみを出さないリデュース（Reduce）と再使用するリユース（Reuse）

※2 「リニューアブル（Renewable：再生可能資源の活用）」

石油等の化石資源と比べて短時間で再生できる資源（再生可能資源：植物等の天然資源）を原材料として利用することで、資源の枯渇や温室効果ガスの発生を抑制するという考え方

※3 「エシカル消費（倫理的消費）」

消費者それぞれが社会課題の解決を考慮したり、そうした課題に取り組む事業者を応援しながら消費活動を行うこと。

③ 環境に配慮した交通手段の利用促進

公共交通機関が充実し、徒歩や自転車での移動も容易な中京区から、過度にクルマに依存しない生活の機運を高め、率先してエコな移動方法を選択する運動を展開することで、環境はもとより、健康にもやさしいまちをめざします。

<主要な取組>

- ・ 過度にクルマに依存しないライフスタイルの普及啓発
- ・ 自転車ルール・マナーの改善を呼びかける啓発の実施

④ 緑化とまちの美化の促進

身近な緑を増やすまちなか緑化の取組と、かど掃きや一斉清掃等の地域で活発に行われている環境美化活動を促進することで、環境にもひとにもやさしいまちづくりを進めます。

<主要な取組>

- ・ 家庭や事業所における屋上やベランダ、庭先での緑化の促進
- ・ 次代を担う子ども向けの緑化や生物多様性も含めた環境に関するイベントの開催
- ・ 区民ぐるみで進める環境美化活動の促進

【ココに注目！ 戦略7実現のポイント】

持続可能な社会の構築に向けては、環境対策、とりわけ地球温暖化対策は急務となっています。地球温暖化の影響が深刻化する今日、我が国においても、2050年までにカーボンニュートラル、脱炭素社会（※）の実現をめざしており、また、京都市においても2050年までの二酸化炭素排出量正味ゼロに取り組むこととし、わたしたちひとりひとりが、環境に配慮した生活を実践することが求められています。

皮肉なことにコロナ禍においては、経済活動の停滞で温室効果ガスが一時急減しましたが、一方では外出自粛やテレワーク等によって、テイクアウトやデリバリーの使い捨てプラスチックごみが大幅に増加するという問題も生じました。

このように、わたしたちの行動や生活スタイルの変化によって、環境対策は大きく変わります。ひとりひとりが何を残し、何を变えていくのかをしっかりと意識しながら、それぞれのくらしのなかで工夫し、できることから続けていくことが、この戦略実現のためのポイントです。

マイバッグやマイボトルを持参する、食材は使い切り食べ残しをしない、生ごみの水切りを徹底する、自転車や公共交通を積極的に利用するなど、わたしたちにできることはたくさんあります。また、坪庭や虫籠窓、打ち水や建具替えなど、京町家のしつらえや先人達の知恵には多くの学ぶべきことがあります。

地道な取組をひとりひとりが自分事として続けていくことが、やがて大きな流れにつながっていくのではないのでしょうか。

※ 「脱炭素社会」

地球温暖化の原因である温室効果ガスの排出源となる化石燃料の使用から脱却し、持続可能な発展が可能となった社会

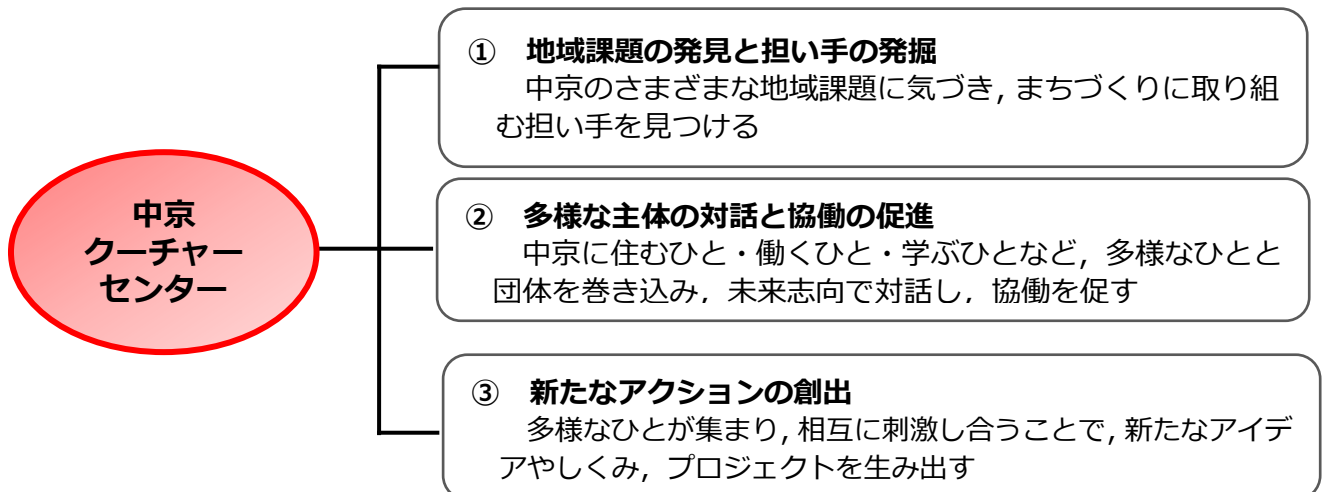
第5章 計画推進のしくみ

- 本計画では、第2期計画で取り組んできた従来までの取組も踏まえ、推進体制のレベルアップを図ることで、中京区でまちづくりに取り組んでいるひとや組織の輪をつくり、互いの交流・連携・協働の取組を広げていきます。
- 具体的には、フューチャーセンターの中京区版である「中京クーチャーセンター」(※1)の機能を拡大することにより、地域課題の発見や課題に取り組む担い手の発掘を強化し、多様な主体を巻き込み、対話や協働を促すことで、新しいアイデアやしくみ、プロジェクトを立ち上げ、本計画の推進をめざします。
- また、本計画全体の進ちょく管理等を行い、計画の実現を着実なものとするため、自治連合会をはじめとした区内でまちづくりに取り組んでいる関係団体で構成する「中京区基本計画推進会議」(仮称)を設置します。

※1 中京クーチャーセンターとは

- 近年、新たなアイデアや問題の解決手段を生み出すしくみとして、フューチャーセンター(Future Center)が注目されています。中京区でも、多様で複雑化する課題に対応していくため、中京区のフューチャーセンターとして2016年に設置しました。
- ここでは、多様なひとが集まり、さまざまな社会課題に対して、「未来志向で新たな価値を創造する」といった視点から議論する「対話の場」(クーチャーセッション)を通じて、区の未来を一緒につくるアクションを創出しています。

【中京クーチャーセンターの3つの役割】



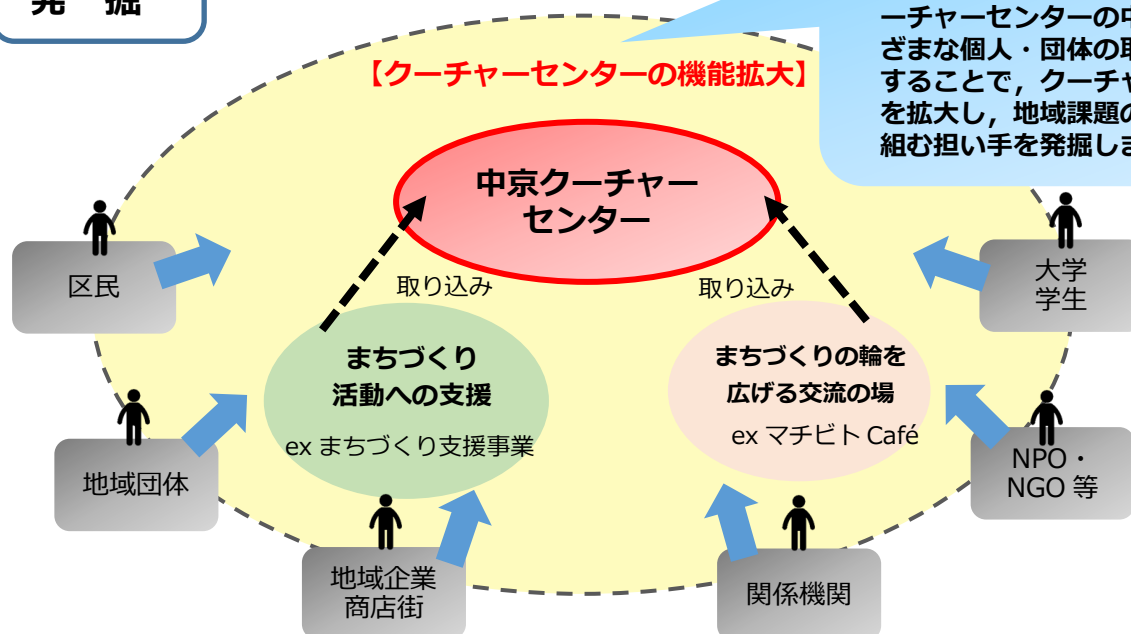
[新たな計画推進のしくみ（イメージ）]

ステップ1

発掘

【役割1】地域課題の発見と担い手の発掘

- ・まちづくり活動への支援や交流の場をクーチャースセンターの中に取り込み、さまざまな個人・団体の取組等にアプローチすることで、クーチャースセンターの機能を拡大し、地域課題の発見や課題に取り組む担い手を発掘します。

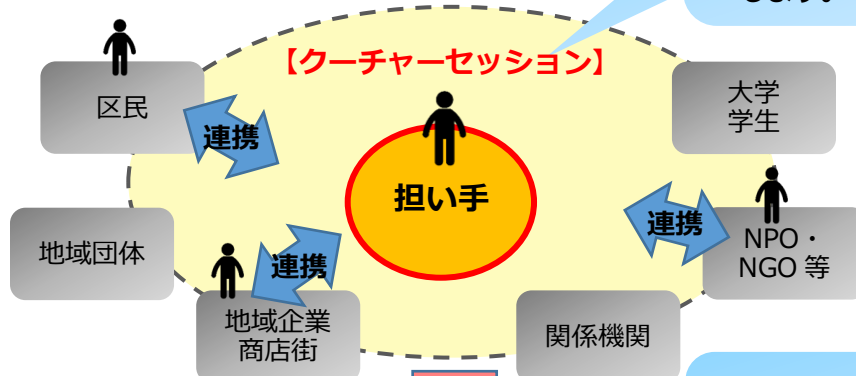


ステップ2

対話

【役割2】多様な主体の対話と協働の促進

- ・クーチャースセンターにおいて担い手と課題解決に必要な地域資源（ひと・情報・場所等）をつなぎあわせるクーチャーセッション（対話の場）を開き、協働を促します。

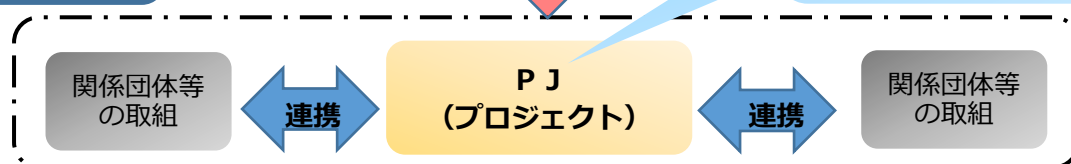


ステップ3

行動

【役割3】新たなアクションの創出

- ・関係団体等の取組とも連携しながら、課題解決に向けたアイデアやしくみ、PJ（プロジェクト）を生み出します。



- ・関係団体等の取組とともに新しく生まれたPJ（プロジェクト）が計画を推進します。
- ・中京区基本計画推進会議が計画全体の進捗よく管理を担います。

